

タイトル:平成 26(2014)年度 教育セミナー(第 10 回)

日時:平成 26 年 9 月 20 日(土)~23 日(火・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

『『地域』を多角的に知るとはどういうことか?』

加藤 博(AA 研フェロー)

本講義は二部からなり、第一部で、講演者のこれまでの研究履歴を振り返りながら、「地域」を理解するためには多様な種類のデータ・資料に依拠して多角的に分析・叙述をする必要があることを述べ、第二部で、その主張を 2011 年のエジプト革命での地域の役割を分析するなかで敷衍した。それぞれの部の要旨は次の通りである。

第一部。記述資料であれ、聞き取り結果であれ、統計データであれ、地理情報であれ、どれか一つの資料を使っただけでは、「事実」に近づけない。どの資料でも長所と短所があり、それを見極めつつ、有効に利用するためには、歴史学で言うところの「史料考証」が重要である。そこでは、長い時間と広い空間のなかで研究対象を位置づけるマクロ的視点とともに、「事実」に近づきそれを感知するためにミクロ的視点も不可欠である。そして、マクロ的視点であれミクロ的視点であれ、それを研ぎ澄ますためには、いくつもの種類の資料を都合の良いようにつまみ食いするのではなく、一つの種類の資料に沈潜する時期が必要である。

第二部。2011 年のエジプト「1 月 25 日革命」は、1950 年代から 60 年代にかけて形成され、現在にいたるまで続いてきた「独裁」政治体制が制度疲労を起こし、20 世紀末からの世代交代という「内圧」と世界のグローバル化という「外圧」の双方に耐え切れなくなることによって起こった。そこには、民主的な選挙が実施されればされるほど、「保守的」な地方住民の意見が反映されるというディレンマが見られた。このディレンマは近現代のエジプト社会の発展径路を知ることによって理解される。現在、エジプト経済の特徴として、貧困親和的な経済成長パターンを指摘できるが、それは近現代における開発と水資源、土地、人口、技術などのリソース配分の歴史の結果である。その経緯は、さまざまな統計データ、地理情報を活用することによって分析することができるが、それら多様な資料を整理する手法として GIS(地理情報システム)は有効である。その結果、地域ごとに異なる「自然環境」、「社会経済状況」、「政治行動パターン」の相関を観察することができた。